
アビリティ・リリース

倉夜拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリテイ・リリース

【Nコード】

N0721K

【作者名】

倉夜拓

【あらすじ】

2種類の人間が共存している世界。「学園都市」に新しく住む事になった神野鷹斗

《カミノタカト》は桐ヶ丘学園高等部に入学する事になった。能力持ち《アビリ

テイ》の鷹斗は特殊な能力を持っているが……。

01 世界

人間は二種類になった。

その理由は、数十年前、日本の都市「東京」に、次元の狭間が出来たからだ。

そこから出てくる謎の生命体はその頃の科学兵器では傷一つ付かなかったらしい。

生命体は無差別破壊を行った。

人々は生命体を「侵攻者」と呼んだ。

「東京」が「侵攻者」によって半壊しかけたとき、四人の人間が現れた。

その人間達は、圧倒的な力で「侵攻者」達を駆除した。

それから数年後、1000分の1ぐらいの確率で特異な能力を持った人間が生まれるようになった。

能力は人それぞれだが、その人間達は「侵攻者」に対抗出来る術を持っていると分かった。

人達は能力者を《アビリティ》と呼び、無能力者を《ノーマル》と呼び分けた。

さらに数年後、大人達は「侵攻者」が「東京」にしか現れない事を

知った。

それを知った大人達は「東京」を「学園都市」にした。

「学園都市」に出てくる「侵攻者」を駆除出来るのは子供達しかないからだ。

殆どの子供達は「学園都市」に住む事になった。

差別が起きないように無能力者ノーマルと能力者アビリティの二種類を混ぜて住ませるようになった。

これが、人類の辿ってきた歴史だ。

そして今――

季節は春。

新しく「学園都市」の学校に入学する者達で混雑する中、私立桐ヶ丘学園の新生・神野鷹斗カミノタカトは桐ヶ丘学園の屋上に寝転がっていた。

（暇だ……）

どうでも良い事を心の中で呟いると。

「お前、新生か？」

急に声がかかった。

「誰？」

鷹斗は上半身を起こしながら答えた。

「俺は狩野渦琉^{カリノカル}。桐ヶ丘学園2年風紀委員だ。それより、お前入学式始まるぞ」

腰に剣をつるし、右腕に風紀委員と書かれた腕章を付けている。

「へ？」

時計を見る。後5分ほどで始業式が始まる。

「やつばー！」

俺は立ち上がり、急いで屋上を立ち去った。

（狩野先輩……か^{カリノ}）

02 帰り道に

ギリギリ間に合った式も終わり、俺は自分のクラスを確認し、席に着く。

すると、

「鷹斗！ さっきどこ行ってたの？」

栗色の髪をした女子が声をかけてくる。こいつは二見レナ《フタミレナ》。鷹斗の幼なじみで「学園都市」に来る前からの仲だ。

「屋上だけど？」

と素直に答えると、あそこは立ち入り禁止だったとか飛び降りるつもりだったのかと聞いてくる。

確かに、俺は自分に人とは違う能力チカラを持っている事を知ったとき、怖くて自殺しようとしたが、今はそんな気はない。

だから、能力者アビリティしか受けれない特別専攻授業、通称《特攻》と呼ばれる

能力者アビリティしか受けることの出来ない授業を取っているのだ。そこで、

―生徒の皆さんに放送します―

―今から、能力者アビリティの新生は身体測定を行います。第1体育館に移動して下さい―

（校内放送か）

「じゃ、俺は身体測定があるから。レナは先に帰つていて」

そう、俺は能力者^{アビリティ}、レナは無能力者^{ノーマル}なのだ。

俺はレナにそう伝えたと、早足に教室を出た。能力者^{アビリティ}の身体測定は、通常とは少し違う。能力者^{アビリティ}は、無能力者^{ノーマル}より並外れた体力と筋力を持ち、加えて一人一つの特異能力を備えている。その能力を確認するためである。

俺が持っている能力は呪ノ縛^{リリース}二階^{フロア}ル者^ル。自分を中心とした半径約5mから鎖を召喚する事ができる。他に見る事のない、希少^{レア}能力^{スキル}だ。しかし、多様性はあるが、殺傷能力は殆どない。あまり使えない能力だ。

身体測定をする理由はこれだけではない。能力者^{アビリティ}が無闇に能力^{チカラ}を行使出来ないよう、制御^{リミッター}革^革を常に付けておかなければならない。

制御^{リミッター}革^革には幾つかの種類があり、能力者^{アビリティ}が思考する事によって発動する能力^{チカラ}なら、解除言語を唱えなければ能力^{チカラ}を発動出来ないようにしたり、個体数は少ないが、常に能力^{チカラ}を放っている能力者^{アビリティ}は、能力^{チカラ}を弱めて周りの被害を減らす制御^{リミッター}革^革を使用する。どちらの場合も能力^{チカラ}を使用する場合は解除言語を唱えなければならない。

「——つと。」

最後の測定、能力測定が終わった。

「学園都市」に来る前からしていた地元での練習より、はるかに簡単な作業だった。能力チカラを強くしすぎるといまだに制御が完全ではないので、いつもの10分の1程度で測定をした。

「あなたの能力は捕縛系です。制御革リミッターの制御レベルは2になります。

」

無感情な機械音声と共に制御革リミッターが出てくる。「学園都市」に来るまでは使用した事がなかったので、これを付けて1日を過ごすとなると、すこし違和感がある。

全ての用事が終わり、帰ろうとした。

その時だ。

ヒュッ。

空を切ったような音と共に、斬撃がやってきた。

「……」

斬撃はかわしたが、衝撃で学生服の袖が切れた。斬撃からして武器は剣だろうか。

「誰？」

屋上で同じ様な台詞を言った気がするが、まあいい。相手が風紀委員な訳が……。

あ、なんかこの人見たことある。右腕に風紀委員の腕章を付けた先

輩じゃないか。

「おい、お前」

なんか声かけられたよ。

「は、はい、何でしょう?」

声が裏返った

「お前の制御レベル、違うだろ」

「はい?」

思わず口に出してしまった。

「だから、お前の制御レベルは2ではないだろう」

「何ですか、俺はちゃんと……」

「嘘をつくな、今の斬撃を避けれる身体能力なら、最低でレベル3はあると俺は思うが」

「なんでそんなことが分か……」「嘘はつかない方がよいよ。後輩くん。」

後ろから、違う声がかかる。

「えっ!?!」

後ろを振り返る。誰もいない。

「君の測定を見てたんだよ。渦琉っちの眼はそこらのレベル判定より確実だから」

今度は前から声がかかる。瞬間移動ですか？。

「それよりも。君、風紀委員にならない？」

「へ？」

「君の能力、^{チカラ}捕縛に向いてるし、私達の風紀委員会に捕縛系の能力^{チカラ}を持った人はいないんだよ。」

いつの間にか二人は隣に居た。

「何で俺の能力^{チカラ}を知ってるんですか？」

「だから、新入生の測定、全部見てたんだよー」

「それで、お前が捕縛系の能力者^{アビリティ}なのが分かったので待っていた。それだけだ」

「さっきの不意打ちを避けれるなら、風紀委員に入っても十分戦力になると思うしねー」

「だから、入ってくれるよね？」

03 戦闘に

「入ってくれるよね？」

あの言葉に選択の余地は無かった。

その後、学校まで引きずられ、風紀委員会への申請書を出しに行くはめになった。通常、風紀委員は1年の内には入れないことになっているのだが、他の風紀委員からの推薦があれば入ることが出来るらしい。

長い1日が終わり、俺は学生寮に帰るなりパタリとベッドに倒れた。

次の日

（眠……い……）

まだ眠気を引きずっている目を擦りながら学校に登校する。登校と言ってもまだ6時過ぎだ。何だか、風紀委員についての説明があるらしい。

放課後にしろよ。

覚束無い足取りで指定されたクラスに行った。

ガチャリ

ドアを開けると、見知らぬ女の子が居た。

あ、可愛い。大人しめの女の子のようだ。しかし、俺はそんな可愛い子と会う約束などしてないはず。

教室を間違えたか？

クラスを確認しようとドアを出てみたが、合っている。もう一度教室に戻ろうとすると。

「ごめんごめん、遅れちゃった―」

昨日の先輩二人組が現れた。

「待たしちゃった？」

「あ、いえ、そんな事はないです」

「そっか、瑠璃は？」

瑠璃？誰の事だ？

「30分程、それより、どうしたの？こんな時間に」

ああ、さっきの女の子か……。ってあの子風紀委員の人っ！？

「そうそう、今からこの子と戦ってほしいと思います―」

そう言いつつ、ビシッと指を指した。その指の先に居たのは……俺！？

「は？」

「ついでに自己紹介―、私は名蔵^{ナクラマリ}眞理、その可愛い女の子は私の妹―です。」

「おはようございます、名蔵瑠璃^{ナクラルリ}、あなたと同じCクラスです。」

衝撃の展開だった。あんなテンション高い先輩にこんな大人しい妹がいるなんて。しかも同じクラスだったんだ。ということは学年も同じなのか。そして俺はこんな女の子と戦うんだ。あれ……戦う？

「では、戦闘準備を」

そう言いながら女の子は制御革^{リミッター}の解除言語を唱える

「ちょっと待て！！いや、ちょっと待って下さい！！許可は取ってるんですか！！戦闘なんて普通出来ないですよ！！」

突っ込みどころかが少し違う。

「それはダイジョーブ、許可は取ってあるし、それにここは戦闘用の教室だから、簡単には壊れないの——」

「では、開始します」

女の子が手を前に出す。すると、手のひらに氷の結晶が出来上がる。氷結系の能力だろうか。

フロア^{フロア}ンス^{ンス}アスク^{アスク}ライフ^{ライフ}
「氷ノ結ニ帰ス者！！」

凜々しい掛け声と共に、巨大な氷の結晶が飛んでくる。

唐突な攻撃に意表を突かれた。

ちょ、避けきれないっ——

「呪^{リリ}ノ縛^{ース}ニ陥^{フォー}ル者！！」

解除言語を唱える。無意識に最善の配置で鎖を召還する。

ジャララララ……！！

鎖の巻き付く音。力を入れると氷が砕けた。

「さすが鎖。なんでも出来るな」

カリノカル狩野渦琉が言う。少し驚く場所が違っただろう。

次は2個、それを俺は一步も動かずに破壊する。

「つつ。まだ！」

女の子は同時に手を振り、5、6個の氷を投げつける。

それに対して、俺は右手を掲げ、握る。

すると、鎖が氷を3個砕いた。

チカラ能力は大体、手の動きなどで制御するのが基本だ。

あと3つ――。

俺は氷の位置を確認し、砕きにかかる――が、女の子は氷を操り、巧みに鎖から逃れていく。

チィッ。心の中で舌打ちをする。

あと1つ――。

残った鎖を移動させ、氷を破壊しに行く。氷はもう目の前だ。間に合うか――。

氷と鎖がぶつかり合う、氷は砕けた。だが、俺の鎖も凍っている。鎖は動かない。制御されていて一度に召還できる鎖もかなり減っている。

しまっ——。

そう思ったのも束の間、目の前に女の子が氷の剣を持って跳躍している。

ズバッ——。

04 異世界人に

ズバッ！

氷の剣が振られた。

剣が肉を切り裂いた。誰もがそう思っただろう。しかし、俺はどこにも怪我をしていない。それ以上に、女の子が持っている氷には刃がない。

なぜなら、俺が切り裂いたからだ。

カラン……。……。

根元から折られた氷の刃は、重力にしたがって地面に落ちた。

……。……。

沈黙。

誰も声を出さない。

（召還してしまった……だ）

その時俺はそんな事を考えていた。

「何、それ……？」

前にいる女の子が声を出す。それに続き、先輩達も喋り出す。
「何何！？そんなのどこに隠してたの？」

「凄いな、瑠璃^{ルリ}の氷を砕くほどの切れ味か」

2人とも驚いている。

その理由は、俺の手に鈍く輝く漆黒の剣が握られていたからだ。

「えーっと……、この剣は、呪^{リリ}ノ縛^{イス}二陥^{フォー}ル^ル者の能力以外^{チカラ}の能力で、漆黒の剣^{ブラックセイバー}って言います……。」

「漆黒の剣……って、お前の能力は鎖を召還する能力なんじゃないのか？」

「あ……、呪^{リリ}ノ縛^{イス}二陥^{フォー}ル^ル者は鎖を召還する能力^{チカラ}何ですけど、この剣はこの世界の能力^{チカラ}ではないんですよ。」

「どういうこと？」

「えーっと、つまり、俺は違う世界から来た人間なんです」

言っちゃったよ。

「この事、誰にも言わないで下さいよ？」

一応、念の為に言っておく。

「って事は、「進行者」か？お前」

狩野先輩^{カリノ}が聞いてくる。

ちよっと引かれてるような……。

「いえ、それに関しては違うと思います。俺を造っている組織はこの世界の人間と一緒にですし、俺には8才までその世界に居た記憶があるんですけど、あんな物は存在してませんでしたよ」

「…異世界は他にもあるという事？」

女の子…もとい、名蔵瑠璃ナクラルリが聞いてくる。

「多分、そういうことです」

「じゃあ取引ね、あなたは私達風紀委員会のためにその能力チカラを存分に発揮してもらおう。そのかわり、あなたの素性は誰にも言わない、それで良い？」

予想外の展開

「えっ……。普通は、そんな事言われても信じないか軽蔑したりすると思うのですが…？しかも風紀委員会に入れ何て……」

「嫌なの？」

「いや、そんな事ではなく、寧ろ嬉しいですか…」

「じゃあ取引成立よ、今日の放課後またここに集合してね」

3人ともぞろぞろと帰りだす、狩野先輩カリノは手を振ってきた。俺はあらゆる事が予想

外すぎて、クラスが一緒に道が同じの名蔵瑠璃ナクラルリに聞いてみた。

「俺はこの世界の間人じゃないのになんであの人達は普通に俺に関わろうとする？」

沈黙。

廊下を歩く足音だけが帰ってくる

「あの…」

「次は負けません、次に勝負する時は必ず勝ちますから、……覚え
てて下さいよ」

何故か闘志を燃やされていた。

この子、大人しそうな子じゃなかったのだろうか……。人は見かけによらないな。

などと考えながら俺は教室に帰った。

04 異世界人に（後書き）

倉夜拓です。

展開が速すぎる気がするので、読みにくいと思います。また少しづつ改稿していきます。

そして、読んでくださってありがとうございます。

05 風紀委員で

「お前さ、名蔵ナクラと付き合ってるのか？」

HRが終わり、出席番号が近かった高校初めての友達、上田孝平カミダコウヘイと喋っていると、そんな事を言われた。

「は？」

キョトンとする俺に

「だってさ、お前、名蔵ナクラと一緒に登校して来たんだろ？ 隣のクラスのやつが言ってるぜ」

「ああ、それか？ それは断じて違う。一緒に登校したんじゃない。ただ朝に風紀委員の集まりがあつて、そこにあいつが居ただけだよ」

「けどお前、名蔵ナクラに告白されたんだろ？」

「いや、寧ろ戦線布告をされた」

「戦線布告？ まあ、そういうことにしといてやるよ」

最後に訳の分からない事を言つと、じゃあなと言つて帰つてた。

初対面なのにすこし馴れ馴れしい気がするが、話やすいやつなので許す。

（そついや、放課後に集合だったよな）

薄っぺらい鞆を持って教室を出ようとすると幼馴染み、レナに声をかけられた。

「鷹斗は風紀委員になつたの？」

「ああ、半分無理矢理だけだな」

苦笑しながら言うと

「私も入れるかな？風紀委員」

真面目な顔で言ってきた。

「お前は無理だろ、無能力者なんだし、あそこは能力者を取り締まったり、「進行者」を撃退するためにあるんだろ」

「分かってるけど……」

「けど？」

「何でもない！　また明日！」

「おう」

（さて、風紀委員会に行くか）

鷹斗^{タカト}が教室に入ると、狩野先輩^{カリノ}と名蔵先輩^{ナクラ}が居た。

「あ、異世界の勇者が来た」

「何ですかその対応？　てか誰にも言ってませんよね？」

「言わないよー。今のところは……ね」

何か怖い……。

「そう言えば先輩達の能力は何ですか？」

「俺は炎^{フア}ノ剣^{イア}ヲ灯^バス者^{イン}だ。空気以外なら大抵燃やせるぞ」

「私は秘密だね。ま、追々分かるよー」

「へえ、炎^{フア}ノ剣^{イア}ヲ灯^バス者^{イン}ですか。レベルはどれくらいですか？」

「4だ。戦ってみるか？」

「いや、良いです。負けそうなので」

「何故だ。お前なら俺くらい簡単に倒せるだろう？」

「いえ、そんなことはないですよ」

「そうか、それよりお前の制御革、レベル4のを持って来ている、着けてみる」

「何で4になるんですか!？」

「昨日の戦いを見てそう判断した、文句あるか？」

「……いや、何もないです……」

眼が怖い。

「それと、お前にはもう一つ制御革を着けてもらう」
リミッター

ブラック セイバー
「漆黒の剣ですか？」

「そうだ、あんな物を無闇に使われたら困るからな」

「あはは、そうですねっと……」

リミッター
制御革を着けてみる。

片腕に着けるのも気持ち悪いので、両手首に一つずつ着けることにする。

「お、なかなか格好いいね」

「そうですか？ 着けると違和感がして俺はちょっと」

「慣れると気にならないよ」

まあ、そういうものだろう。

そんな話をしていると、ナクラルリ名蔵瑠璃が来た。

「今日は何の用？ 姉さん」

「えへん。今日は仕事を持ってきたんだよ」

（それは威張ることなのか？）

「何と！この学校で誘拐が起きてます！！」

.....。

「「へ？」「」

それ、事件じゃん。

06 2人きりで

「事件ですか？」

「仕事だよ？」

「警察沙汰ですよね？」

「風紀委員の仕事だよ？」

本当に仕事だと思っている。もう話が通じない。
俺が溜め息をついていると

「…それで、誰が誘拐されてるの？」

^{ナクラ}名蔵が話を繋げてくれた。

「今学校に一週間以上来てないのが18人、その中で連絡が取れてない人が3人だね」

「まだそこまで数が増えてないな、容疑者は？」

「んーっと、教師2人と生徒1人かな」

「…生徒？」

「うん、その1人なんだけど、学校に来てなくて、夜に良く出かけてるみたいなの」

「それは只の不良じゃないのか？」

「素行じゃなくて、その能力が引つかかるの^{チカラ}」

「何ですか？」

「人の心を読み取る能力つてとこかな？」

そんな能力があるのか。^{チカラ}知らなかった。

「だけど、その何が誘拐に役立つんですか？」

「人のしたい事とかを読み取って、誘って、連れて行くんだよね」

そうか、よく考えたな。そんな事普通思いつかばないと思うが。

「じゃあ、教師組と生徒組に分かれよっか？」

「そうするか」

「そうですね」

「…そうする」

全員の了解が取れる。

「と言うことで、私と渦琉っち、瑠璃と鷹斗くん」

「それなら、俺達は教師組だな、2人の調査だから、先輩の方が良いだろう、丁度、明日からは土日と休みが続くしな」

「と言うことで、瑠璃と鷹斗くんは生徒の方宜しくね」

「え、ちょっと待っ……！？」

先輩達は早々に出て行ってしまった。

「…何故あなたと何ですか？」

名蔵ナクラがこっちを睨んでくる。

…そんなの、俺が聞きたいよ。

「まあ、仕方ありません、今日は帰ります、明日、また此处で、時間はまたメールします」

「あ、分かった」

連絡先は風紀委員に入った際、一通り聞いている。

「明日、10時に、集合」

そんな今どきの女子高生とも思えぬ淡泊なメールだった。

女の子とはあまりメールすることは無い（レナを除く）ので、何を返信したら良いのか良く分からない。当たり障りの無い言葉にしようと思ひ……。

「了解した」

まあ、反感を買うような言葉では無いだろう

「送信……つと」

もう11時過ぎだ。明日に備えてもう寝るか……。

「…遅い、30分も待った」

俺が10時前に教室に入ると、そんな事を言われた。

「え、約束の時間は10時じゃ……」

「…私は何時いつも30分前には集合場所に来ています、次からは待たせないように」

どこのお嬢様キャラかよ。素っ気無い……。

「分かったよ、じゃあ、早いとこ生徒に話を聞きに行こうぜ」

俺は教室を出ようとする。

「…あ！ …あの……」

声を掛けられた。なんだよ……って、顔が少し紅潮している。

「な、何？」

ちよつと焦る。

「…えっと、あの、昨日のメール、おかしく無かった？私、人にメールする事が無いから……」

じーっ……。

ちよつと上目で見てくる。

前言撤回、やっぱり可愛かった。

しかし、そんな事が。

「ああ、気にしないでいいよ、俺もあんまりメールとか打つの苦手だから」

「そうですか、なら行きましょう」

ちよつとほつと一息してる。ああ、やっぱり可愛い。

「そうだな」

笑いながら、俺達は教室を出た。

コイツ実は良い奴っぽい。

そんな光景を見ている人間が2人

「……ふふっ、やっぱり瑠璃^{ルリ}の意中の人は鷹斗くんか」。けど、瑠璃^ルにしては積極的だな……。ふふっ」

「人を付けるの、あんまり好きじゃないんだが……。しかし、良くあいつが神野の好きだつて分かったな」

「私の能力、全テヲ透^{チカラ}ス者^{オール}に見抜けないものなどないわよ」

「はあ……。やっぱり能力使ってたのかよ」

07 ファーストフード店で

「……ったく、風紀委員初仕事がこんな面倒だなんてな」

「…そう言えば、あなたはこれが初めての仕事なんだ」

昼過ぎ、特に収穫もなく、そこらのファーストフード店で昼食を取っていた俺達

はそんな話をしていた。

「ああ、そっぴゃお前は俺と同じ1年だけど、何で風紀委員に溶け込んでるんだ？」

「…それは、姉さんが研修と言つて、中学3年の時からずっとあの風紀委員に行かされてたから…かな」

「中学つて、お前、いつから「学園都市」にいるの？」

「…中学生から」

「マジで？じゃあ「侵攻者」とも戦った事あるんだ」

「…あるけど、あなたは高校から入学したのですから、「侵攻者」は見たことないんだよね？」

「いや、此処だけの話だが、国が把握して無いだけで東京以外にも「侵攻者」が出てくる事があるんだよ」

「えっ!？」

びっくりして名蔵^{ナクラ}は手に持っていたフライドポテトを落とした。
初めて驚いた顔を見た。

驚いた顔も可愛い。

「…どこ？」

落としたポテトを拾いながら聞いてくる。

「俺が異次元から出て来たところ、そこから良く出てくるようになった」

「…それって、あなたのせいじゃないの？」

「いやそうなんだけど、その頃から2つ能力チカラが使えてさ、何人かの能力と一緒に、出てきた「侵攻者」を狩って、その残骸を売ってた」

「…残骸って、売れるの？」

今度は少し困ったような顔をした。

意外と表情がある奴だったんだ。

「そんなへんな顔するなって、あれはかなりの硬度を誇ってるから、色んな物に利用されるんだ」

「…へえ」

「ついでに言うと、ぶっちゃけ「学園都市」の運営費半分くらいは「侵攻者」の残骸を売ったら稼げると俺は思う」

「…「学園都市」はその残骸をどうしてるの？」

「多分、研究とかじゃないのか？そっぴゃ何時も集まっている教室も壁とか床は残骸だったし」

「…気持ち悪い」

「まあ、洗浄されてるだろうから気にすんなよ」

……。

あ、沈黙だ。

分かっていてもそう言うの女子は気にするんだよね。
言わない方が良かったかな？

「ん、じゃあそろそろ出るか？」
「…そうですね」

名蔵ナクラがポテトを食べ終わるのを見て、俺はゴミを捨てに行く。

結局今日は大きな収穫が無く。明日も集まる事にした。
貴重な2連休が……。

目覚ましをかけようと携帯を見ると、メールが入っていた。狩野先カリノ輩からだ。

「教師の1人は違った。お前たちはどうだった？」

もう1人終わらせたのか。流石先輩達さすがだな、と思いながらメールを返信した。

…けど、名蔵ナクラも意外と女の子らしかったな。

俺も男なのだ。可愛いものは可愛いと思う。

「そんな事より、もう寝るか」

そう言いながら、俺は照明を切った。

08 教室の外で

待ち合わせ時間の30分前に行くと、教室に入ろうとする名蔵瑠璃がいた。

「あ、名蔵ナクラ」

「え？あ、あなたですか」

ドアを開ける直前だったらしい。
時間には間に合った。

「誰だと思ったんだ？」

「……いや、姉さんかと」

「そうか、そりゃ残念だったな」

「……ところで、今日はどうします？」

「今日は本人に会ってみるか？ いるか分からないけど」

「そうですね、そうしましょう」

「そっぴゃ、お前の能力チカラってレベルは何？」

「私ですか？ 私はレベル5かな」

こいつ、敬語とタメが混ざってるんだな。
今更の事だが。

「凄いな、5って言えば最高ランクじゃないのか？」

「はい、ですけどあなたより下ですよ」

「あれは関係無いだろ、能力チカラ隠してたし」

「いえ、私のあれは力量不足です。ですが、次は必ず勝ちますよ」
「はは…、まあ頑張れ……」

「…戦いを挑んだ相手に言われたくないですね」
「そうですか……」

ズッー。ズズッー。

何かが開くような感じ。直感で分かる。

「!? この感じ……」

「こんな時に……」

俺と名蔵ナクラが苛立った声で言った。

「「侵攻者！」」

2人は同時に察知した。

アビリティ
俺達能力者は次元の狭間を察知出来るらしい。
原理はよく知らないが。

俺達は脚にフォースというこれまた原理の分からない力で脚力を上げて走り出す。
。

このフォースという力は、鎖や氷などの物を動かしたり召喚したりする時に消費
する力で、簡単に言えばMPマジックポイントみたいなものだ。

あとは、フォースを鎖に纏まとわせると、動きがちっと滑らかになる。

ついでに、それを使えば次元の狭間の場所もある程度は分かつたりする。

「それにしても……場所近くないか？」

「そう……ですね、行きますか？」

「そだな」

ブラウン、ブラウン。

何だ？

ポケットで何か震えている。

あ、携帯か。

相手は…狩野先輩カリノか。

「はい、神野カミノです」

「ああ、今お前達どこにいる？」

「ええと、学校内です」

「そうか、なら「侵入者」は気付いているな」

「はい、今向かってます」

「ならいい、俺達も向かうから。それまで足止めを」

「了解です」

ブツ。電話が切れる。

「名蔵ナクラ」

走りながら声を掛ける。

「何でしょう」

「取り合えず足止めしろってさ」

「いやです、私が狩ります」

なんか妙にツンとしてる。

「じゃあ、俺も手伝うよ」

「勝手にして」

つと、そんな事をしている内に次元の狭間発見。

「フロース・アスク・ライフ
氷ノ結ニ帰ス者!!」

「リリス・フォー
呪ノ縛ニ陥ル者!!」

同時に解除言語を唱える。

まず次元の狭間から出てきてる雑魚^{ザコ}2体を纏めて締め上げる。

「ナクラ
名蔵!!」

「…分かった」

名蔵《名蔵》が氷で鎖ごと雑魚^{ザコ}を凍らす。

「ブラック・セイバー
漆黒の剣!」

俺はもう1つの能力^{チカラ}、漆黒の剣を使い、氷を切り裂く。

ビキイイ。

氷が雑魚^{ザコ}ごと砕けた。
良しっ!

隣では名蔵ナクラも片方を倒している。

流石に強い。

次元の狭間から中位の「侵攻者」が出てくる。

俺は数歩後ろに下がり、右手を振るう。

鎖が「侵攻者」の両手首に巻き付く。

名蔵ナクラは氷で両脚を凍らせている。

相手は動けないはずだ。

俺は漆黒の剣ブラックセイバーにフォースを纏わせ、切れ味を上げる。

「ハア！！」

気合いと同時に、跳躍ハイスprung、剣を振り下ろす。

ズパッ！

中位「侵攻者」の右腕が切り落とされる。

「侵攻者」は言葉にならない悲鳴をあげ、左手に巻かれている鎖を引きちぎり、大

剣を振り回す。

「うわっ！」

俺は紙一重で大剣を避け、着地する。

「危なっかしいです、気を付けて」

名蔵^{ナクラ}が声をかけてくる。

「だいじょーぶっ!」

脚力を上げ、前進、「侵攻者」の懐に入り込む。

下段から上段への切り上げ、腹を切り裂く……が、浅かった。

「チィ!」

舌打ちが出る。

中位クラスになると、再生能力が付いてくる。厄介だな。
右腕の再生が始まる。

「氷結!」

そんな掛け声と共に、右腕の切断部分が凍っていく。

「サンキュ!」

短い感謝を述べ、俺はもう一度「侵攻者」の懐に潜り込む。

上から大剣が降り落ちてくる。それを鎖でカバーしながら、漆黒の剣に螺旋状に
フォースを集め、小さな風を起こす。

「ちえあぁ!」

さっきの傷口をもう一度切る。風を爆発させ、中身^{なか}から身を削る。
ドシヤ。

「侵攻者」は赤い液体をだらだらと流しながら倒れた。

08 教室の外で（後書き）

少し話が長くなりました。

バトルシーンを短くかつ分かりやすく書けるようになりたいです。

09 戦闘中に

「えーっと、終わったか？」

「もう出てこないと思います」

「そうか」

「しかし、あなたばかり目立ちすぎです。私はサポートになってしまいました」

「ああ、ごめん」

「ま、まあ、あなたならいいですけど……」

戦闘をしたからなのか、顔を紅潮させている。
やっぱり可愛い。

「けどさー、可愛いよな。お前って」

つい口に出してしまった。

「えっ!？」

耳まで真っ赤になっていく。

「そんなに嬉しかったのか。
可愛いって言われて。」

「えと、あの、か、可愛いだなんて……」
何故か深呼吸をしている。
一息つき、

「ホント?……」

消えてしまいそうな小さな声で言ってくる。
ヤバイ。今の動作可愛すぎる。

「ああ、可愛いと思うよ」

そう言うのと、手を前に交差させて恥ずかしがっている。

面白い。

次からたまに言ってるやろう。

「そ、それより、次元の狭間の封印をお願い！」

「あはは、りょーかいっ」と

^{ナクラ}名蔵とは話しやすくなったな。最初は無口キャラだと思ってたのに。

次元の狭間を閉じる事を封印と言い、^{アビリティ}能力者の大体は出来る。一応封印出来る俺は次元の狭間の前に立ち、フォースを狭間に纏わせる。すると、次第に次元の狭間が閉じていく。

すると、次元の狭間に何か奇妙なモノが引っ掛かる、まるで悪魔の手のような…。

（もしかして…亜種！？）

^{タカト}鷹斗も今まで数回程しか戦った事のない、亜種、それはイレギュラーな能力を持っていて、戦ってみるまではどんな能力を持っているか分からないのだ。

思ったら即行動。

「名蔵^{ナクラ}！！ 氷結頼む！」

まだ顔を赤らめている名蔵^{ナクラ}に向かって叫んだ。

「え！？ あ……、氷結！」

次元の狭間ごと凍らした。

これでまずは大丈夫か……。大丈夫だった。
今のうちに亜種の事と戦い方を教えないとヤバイ。

「名蔵^{ナクラ}！ もう直ぐ次元の狭間から亜種が出てくる、気を付けろ……」
「あ、亜種？」

「亜種つてのは上位でも中位でもない微妙なクラスだ、けど、1つはイレギュラーな能力を持っているから、最初は遠距離から能力を見極めてくれ、俺が攻める」

「ちよつと……」

「来るぞ！」

炭みたいな真っ黒い体から、触手が出てくる。

魔人とも言いたいのか、形だけは人間だ。フォース収束、螺旋をつくり、ガラ空きの胴体に叩き込む。

……が、風が消えていく。

（もしかして、触れたフォースを無効にする能力か？）

試しに鎖で体を縛ろうとするが、弾かれてしまう。

鎖が弾かれると言うことは、多分無効化能力だろう。

今までに一度しか戦った事のない、厄介過ぎる能力だ。

触手が動き出す。漆黒の剣はフォースで造られた武器では無いため、切る事が出来る。

鷹斗は自分を狙った触手を剣で切り裂く。が、切れたあとも少しは動くらしい。

そんなことより、フォースが効かないってことは名蔵が能力を使えないって事だろ！

名蔵の方を見る。今はフォースで脚力を上げて避けているが、それも時間の問題だ。

っと、触手が全て名蔵に向く。能力が効かない事が分かったのだらう。知能が高い。

「名蔵！ 危ない！」

叫ぶ。が間に合わない。

全てのフォースで脚力を上げて跳躍。

——速く、速く、速く。

そんな言葉が頭の中で連呼される。

あと数メートル。

剣を上げる。

振り抜く。

しかし、触手が多すぎて全て切り裂けない。
名蔵の四方に触手が迫る。

——もう、逃げられない。

09 戦闘中に（後書き）

最初は名蔵にデレの要素をいれるつもりはなかったのに、
いつのまにかこうなっていた。
すいません…。

10 事件は収束に

「炎ノ剣ヲ灯ス者！！」

詠唱とともに、炎剣、炎を宿した剣が触手に振り下ろされる。

ズバツ！

触手が全て切り裂かれ、切り口に火が付く。

そこに立っていたのは、炎剣を片手に持った狩野先輩だった。

狩野先輩に切られた触手が燃え尽きて炭になっていく。

…フォースは使えない筈じゃなかったのか？

「何でフォースが消されないんですか？」

「ああ、俺の炎は、あらゆる能力や力を糧に燃える」

「じゃあ……能力無効化能力を逆に利用して燃えたって事ですか？」

「まあ、そういう事になるが、正直、成功するかは分からなかったんだ」

「けど、何でこいつが無効化能力を持っているって分かったんですか？」

「それはな、おい眞理、出てこい」

狩野先輩が向いた方向に人影があった。名蔵先輩だ。

「あはは、バレちゃった？」

「…居たんですか？」

名蔵（妹）^{ナクラ}が聞く。

「うん、中位クラスを倒したところからねー」

じゃあ、あの恥ずかしい会話も聞かれたんだ。

「と、それより、ちょっと待ってて、渦琉っちヨロシクッ！」

「ああ、処理がまだだったな」

そう言つと、狩野先輩^{カリノ}は剣先を亜種に向け、一言。

「爆発」
^{エクスプロード}

剣先から炎が溢れ、亜種を焼きだす。

「よし、オッケー。で、私達がこいつの能力を知ってた理由は、私の能力^{チカラ}のお陰でした」

「能力？先輩^{チカラ}の？」

「そうだよ。全テヲ透ス者^{オール トゥロ ウス}っていうモノの心を見る能力^{チカラ}、これを君にセツトしてたから、昨日と今日君が思ってた事は全部分かってるよ、君の過去とか出身地の事とかも」

「あと、誘拐事件も嘘だ。お前らの動きを見るためにした風紀委員入会テストみたいなものだと思ってくれ」

「そうだったんですか、それは狩野先輩^{カリノ}と名蔵先輩^{ナクラ}、名蔵も知ってたんですか？」

「…いえ、私は知りませんでした。初耳です…」

「ああ、済まないな。知ってたのは眞理^{マリ}と俺だけだ、あと、先輩じやなくて渦琉^{カル}で良いぞ、周りはそう呼んでる」

「え？そ、そんな俺なんか馴れ馴れしく出来ませんよ」

「鷹斗も風紀委員なんだ、良いぞ」

「えと…、じゃあ、分かりました。渦琉」

「じゃあ私も眞理って呼ん「全力で遠慮します」

流石に恥ずかしすぎる。

「えー。何でー？」

「女子の先輩を名前で呼ぶなんて恥ずかしいからです」

「じゃあ、異世界から来たってみんなに言うよ？」

それがあつた。

口では勝てないと言うことが…。

「分かりましたよ。眞理」

「じゃあ、これにて初仕事しゅうりょく、後片付けは私達がやつくから、瑠璃と

鷹斗くんは先帰って良いよー」

「良いんですか？」

「気にするな、中位クラスは鷹斗たちが倒したんだからな」

「じゃあ、御言葉に甘えて、有難う御座いました」

「…では、さようなら」

俺達は学校と一緒に出て、途中までは帰り道が同じなので一緒に歩く。

数分歩いた所で、名蔵から声をかけてきた。珍しい。

「…あの、すいません」

「ん、何？」

「た、鷹…斗、って呼んでも良いですか？」

「別に良いけど？レナもそう呼んでるし」

「…では、鷹斗…、私の事は瑠璃^{ルリ}って読んで下さい」

「はあ！？名蔵^{ナクラ}先輩かよ？」

「いえ、その…、レナって人に…」

「人に？」

「… 対抗するため…に」

「対抗？何言ってるんだ？」

「分からないならいいよっ」

「ふうん、じゃあいいわ」

「では、私はこちらなので、また明日」

「また明日な」

俺は後ろ向きに手を振る。

（しかし、今日の事件は結局なかったのか、ま、いいか）

11 噂に

「なあ、やっぱりお前名蔵ナクラとつき合ってるんだな」

学校に来た瞬間、一応の友達、上田孝平カミダコウヘイに聞かれた。
うわ、疑問から確信に変わってるよ…。

何故か休み明け、学校に來ると、クラスの半分くらいの男子に聞かれた。

ついでにレナにも。

「だから、なんで？」

「いやだからさ、休みの日に2日とも一緒に居たらしいし、そんなんだろ？」

どこからそんな情報が回るんだ。

「いやそれは風紀委員の仕事だから」

「風紀委員？マジで？風紀委員に入るだけであんな黒髪ストレートでちよつと背が低い、可愛すぎる人とデート出来るんだ」

何でそんな特徴を述べるんだ。

「いや、デートじゃないし、しかも昨日なんかは「侵攻者」との戦闘あつたし」

「そして可愛い名蔵ナクラに助けて貰ったんだろ？」

「いや、そんな事はない……と………」

そんな風に言葉を濁していると、上田カミダの顔が恐怖の色に変わった。

恐る恐る後ろを見ると

「…私は役に立たなかった…と言いたいのか？」

いつの間にか名蔵^{ナクラ}が居た。

「いや、そんな事はないです！…とても役に立ちました！あなたが
いなければ俺死んでました！」

精一杯の言い訳を言う。

「…そう、ならいいです、そのあなたも、変な噂を流さないでく
ださいね」

そう言い、スタスタと自分の席に行った。

「……はあ、な？ あんなんだろ」

溜め息混じりにそう言う

「いやいや、お前は分かってないよ、しかし、クラス一可愛い女子
の彼氏の友達

かー、俺も複雑だな」

「は？彼氏？何言ってるの？」

「いいよお前、もう何でもない……」

そう言う^{カミタ}と、上田も自分の席に戻ってしまった。

意味が分からない。

結局、学校が終わるまでに10人程の男子女子にからかわれた。

放課後、風紀委員会に行かなければならなかったので、名蔵ナクラと一緒に
行こうと誘うと

「今の状況でよくそんな事が言えますね」

と、短く切り捨てられた。

仲良くなれたと思ったのに。
残念だ。

「こんにちは――」

そう言って教室に入ると、狩野先輩カリノだけが居た。

「えーっと、こんにちは。渦琉カル……」

「おう。鷹斗タカトか」

「今日は何の用事ですか？」

「ああ、今日はお前と特訓だ」

「特訓？何ですか？」

「いや、俺が戦いたいから？」

「何故疑問形何ですか……」

「いいだろ？」

「あー、いいですよ。もうなんでも」

「じゃあ、今からするか」

「はい」

2人は剣を構え合い、神経を集中させる。

「エキスプロード
爆発!!」
「ちよっ……」

剣先から爆発する。

いきなり本気ですか!?

12 放課後に

「エクスプロード
爆発！！」

「ちょ、待つ……」

いきなり本気ですか？

「リリ
ース
フォー
呪ノ縛二陥ル者！！」

爆発の先に鎖を集中させ、爆発を抑える。
俺は一步跳躍し、鎖を狩野先輩に絡ませながら剣を振る。

——が、鎖は剣の熱風で溶かされ、先輩もこちらに切りかかってくる。

鉄と鉄がぶつかり合う音。

炎剣なので間近に迫ると熱い。

剣を受け流し、バックステップ。

左手を振り下ろし、鎖追加召喚。

今度は四方からの鎖攻撃。

「我が炎を持って灰に還す！」

両手に炎の剣が握られ、連斬。鎖が綺麗に全て切り落とされる。

（流石に強すぎッ……！）

能力自体はそこまで強くないが、使い方が巧すぎる。
チカラ

先輩が炎剣を投げてくる。

俺は漆黒の剣に風を纏わせ、撃墜する。
ブラック セイバー

——瞬間、俺のフォースを利用し、炎剣が爆発する。

あ、忘れてた。

爆発をモロに食らった俺は、せき込みながら先輩に言う。

「ちょ……それは無し……です……よ」

「済まないな。忘れていた」

「忘れてたじゃないですよ！死にかけましたから！」

「生きてるのだから良くないか？」

「なんですかその考え方……ああ、もういいですよ」

「そうか」

何か、この人達と会ってから、大概の事に怒らなくなったと思う。

「あ、瑠璃。どうしたんだ？」
ルリ

いつの間にか名倉が来ていた。
ナクラ

「…今日は何も無いのですか？」

「ああ、眞理マサはもう帰ったぞ」

「…そうですね。では、今している事が終われば帰ります」

そう言つて、名倉ナクラはノートを取り出した。

「じゃあ、続けるか」

「そうですね」

俺達も戦闘を始めた。

日も落ちた頃、帰る事になった。

先輩は帰る道が違つので、結局最後まで残っていた名倉ナクラと帰ることになった。

「る……瑠璃ルリは名倉ナクラ先輩と家は違つのか？」

帰り道、そんな事を聞くと

「…はい、そうですね」

「へー、そうなんだ」

「はい」

「そついや、お前ノートに何書いてたんだ？」

何気なく聞いてみた。

……。

何故沈黙？

「えっと…誰にも言わないでくれる？」何故か顔を赤らめながら聞いてきた。

こっちが聞いたのに。

「別に言わないけど？」

「…そう。じゃあ、今から、その……い……い……」

「い？」

「家に来てくれる……？」

上目遣いに聞いてきた。

可愛すぎる。

それ、反則だろ。

「ああ、良いけど。お前はいいのか？」

「はい。一人暮らしですし」

「……じゃあ、行かせて貰うよ」

「…では、次はこっちを曲がって」

「了解つと」

ノートに何を書いたかだけで女の子の家に行くことになるなんて予想外だ。

家に行ってみると、凄かった。

見た目からは想像出来ない部屋だった。

広い部屋にひたすらぬいぐるみが置いてあるという、正に女の子って感じだ。

「えーと……。それで、ノートの中身は何なんだ？」

苦笑しながら聞くと、名倉^{ナクラ}は本棚の方へ行き、ノートを一冊取り出して、渡してきた。

……はい？

取りあえず、ノートを開いてパラパラとページをめくる。

数ページ読んだところで気付く。

これ、バトル小説じゃないか。

「な、何故これを俺に見せる？」

「今日書いてたのはその続き……です」「え？お前が書いてるの？」

「私意外に誰が書くんですか！？まったく……」

そう言いながら、ノートを数冊取り、俺に渡してくる。

「…これ、明日までに呼んできて下さい」

「へ？」

「だから、このノートに書いている話を読んできて下さい！」

威圧感がある。

断れない。

「え……あ、はい……」

了解してしまった。

「^{ちな}因みに、それを読むのはあなたが2人目です」

「1人目は？」

「ね……姉さんです」

あ、無理矢理読まれたわけね。
分かるよ。

「じゃあ、努力するよ」

「はい。読んできて下さいね？」

「あ……はい……」

拒否権無しか。

結局、読むまでに3時間程かった。
だって、600ページくらいあったんだから。

13 携帯小説で

朝、学校に行くと、真っ先に感想を言いに名倉^{ナクラ}の机に行った。

「名倉^{ナクラ}！！ この話……」

「名前で……呼んでって言ったよね？」

「え？」

あれ、学校でも適用ですか？

「瑠璃^{ルリ}、お前は作家の才能があると思う」

「それは誉めているのですか？」

「当たり前だろ。あれは携帯小説にしたらずくにヒットする話だ」

「……携帯小説？」

「ああ、知らないのか。携帯小説ってのは自分が書いた小説を携帯を通して他人に読んで貰うことだ」

「……嫌ですね」

「何故！？ こんな才能あるのに」

「人に見られるのが嫌なの！」

何で怒鳴られなければならない。

「じゃあ、何で俺に見せた？」

「……あなたは……その……特……別だから……」

「ん？」

良く聞きたれなかった。

「何て言っただ？」

そう言うと、顔を真っ赤にして怒られた。

「もういい！ あっち行って！」

急にそう言われると、胸を両手でぐいぐい押された。

「何なんだ？」

仕方なく自分の席に着くと。

「おい、何を朝から痴話喧嘩してるんだコノヤロー」

後ろの男子にその声をかけられた。

「は？ 何が？」

振り返りながら聞き返す。
やはり上田^{カミダ}か。

「だから、朝からイチャイチャすんなよお前、ぶっ飛ばすぞ」

「別にイチャイチャなんてしてないけど？」

「お前な、最後何て言われたか覚えてないのか？」

何でそんな事を聞く。

「えーと……。『もういい、あっち行って』だったと思う」

「その前だよ！ 聞いてないのか!？」

「ああ、良く聞き取れなかった」

「それはな！ お前の事が特……」

カミタ
上田は言葉を最後まで言えなかった。

ナクラ
涙目の名倉に睨まれたからだ。

ナクラ
涙目の名倉、可愛すぎる。

今日から本格的に授業が始まるらしい。

この学校は「学園都市」の中では結構学力が高いらしい。

まあ、最初の授業は自己紹介や授業内容の説明で終わるだろう。

6時間目で1日の授業が終わった。

結構長く感じた。

中学より授業時間が5分長くなったのだが、それだけで体感時間が15分くらい長くなった気がする。

この「学園都市」は、部活が無く、その代わりにバイトが出来るようになっていて。

基本的に授業料以外は自費なのだ。

ついでに俺はPCで金を稼いでいる。

いつもの通り俺は風紀委員室（勝手に命名）に行くと、珍しく誰もいない。

（珍しいな）

誰もいない教室にいと、勢い良くドアが開いた。

ビクウツ！！

……心臓に悪い。

ってか、誰？ ナクラ 名倉先輩？

栗色の髪に小さめの身長、桐ヶ丘の制服、風紀委員の腕章。誰？

自分の記憶から顔と名前を一致させようとする

「あつ！ 異次元から来た人だ！」

何その気付き方。しかも何で俺の個人情報を知ってるんだ。

「誰？ お前？」

そのままの感想を口にする

「誰って悲しいな。私は風紀委員の一員だよ」

何このテンション？名倉先輩より酷いかも。

「何年ですか？」

「そんな事も知らないの？ 瑠璃に言っただけなのに」

「瑠璃って、名倉を知ってるんですか？」

「知ってるも何も、瑠璃は私の親友だよ」

「そうなんですか？ じゃあ1年ですか？」

「違うよ。私は2年。眞理達と同じ学年だよ」

「そうですか」

「ついでに、名前は早希・A・マリアです」

ああ、外国人ですか。

すると、急に目を細め、冷たい

「それよりも、これ以上は瑠璃に関わらないでくれる？」

14 鷹斗vs早希に

「それよりも、これ以上は瑠璃ルリに関わらないでくれる？」

「……は？ 何で？」

「あなたが風紀委員になってから、瑠璃ルリの様子がおかしくなってるのよ」

「ちよつと待て、お前は名倉ナクラの何なの？」

素直な感想だ。見知らぬ奴に口出しされたくない。

「私は瑠璃ルリの親友よ。本人に聞いても良いわよ」

メツチャ自慢気に言ってきた。
正直むかつく。

「ああ、そう。じゃあな」

出来るだけ平常心で帰ろうとする。

……と、早希なんたらが突っかかってきた。

「待ちなさいよ！ もう瑠璃ルリに関わらないって誓える？」
「さあな」

俺は片手をひらひらと振りながら教室を出ようとする。

……ドアが開かない。

「こうなったら実力公使よ。私が勝ったらあなたは瑠璃ルリに近付かない。私が負けたら……まあ、それはないわね」

何なんだその自信は？

「俺にメリットがない……」

勝っても負けても名倉ナクラに俺を近付けないだろう。

「じゃあ、あなたが勝ったら瑠璃ルリに喋りかけることくらいは許してあげる」

何と理不尽な。

「まあ、それでいいか……」

俺は仕方無く呪リリノ縛ース二陥フォールル者の制リミット御を解除する。

「いつでもどうぞ」

両手を広げて言う。

「随分舐めてくれるじゃない？」

早希サキは拳をポキポキと鳴らしながら近寄ってくる。

「銀ノ塊シルバーヲ造マスル者クリエーション……!!」

銀召喚か、面倒だな。

銀召喚は、大抵の武器は造れてしまふ。なんで風紀委員には希^{レア}少^ス能力^{キル}が多いのか。

四方から銀の弾が飛んでくる。俺はそれを鎖でいなす。

今度は銀槍が飛んでくる。鎖を増やし、いなす。

その繰り返し。

「あああああー！ー！ めんどくさい！」

叫んだのは早^{サキ}希^キだ。どんだけ短気なんだよ。

シルバーツインソード
「銀ノ双剣！！」

銀の剣が両手に現れる。歪な形の左右非対称の双剣だ。

「マジで？じゃあ、漆黒^{ブラック}の剣^{セイバー}」

俺の手に漆黒の刃が現れる。

鎖と銀がぶつかり合う中、隙あらばという形で双剣を振るってくる。

……巧いな。

性格はともかく、戦闘技術だけなら確かな腕だろう。

だが、所詮はそこ止まり。攻撃がパターン化してきてる。
今なら簡単にいなせる。

右、右、左、右、左、左……

ゲームの攻略パターンのように、攻撃をいなす。

こいつは、左で最後した後、バックステップする癖があるな。
フィニッシュ

瞬時に見抜き、行動を開始する。

……左、右、右、左……

早希^{サキ}が攻撃を中止した。

今だ!!

バックステップする早希^{サキ}に対し、俺は前進する。

漆黒^{ブラック}の剣^{セイバー}を振りかぶり……

「待つて!!」

ドアの近くから声が聞こえた。名倉^{ナクラ}だ。

俺は攻撃を中止し、名倉^{ナクラ}の方を見る。

「名倉^{ナクラ}か……」

「……名前で」

今それを言われると辛い。

「……瑠璃……璃」

「はい」

「こいつは誰だ？」

「その人は私の姉みたいな人ですね……」

やはりそうなのか。

「仲が良いのか？」

「はい。良くして貰ってます」

「そうか。それで、今日はどうしたんだ？」

「……いや、そのこのマリアに呼ばれたので」

「マリア……？ああ、こいつの事が」

「それで、どうしたの？マリア？」

黙っていた早希^{サキ}が口を開く。

「いや、瑠璃^{ルリ}に悪い虫が付かないように駆除してたところなの」

俺の事ですか。しかし、俺と名倉^{ナクラ}では喋り方が全然違うな。

「だから、こいつが瑠璃^{ルリ}にふさわしいか調べるために、私は3日程この人の家に住むことにしたの」

15 深夜に

「…本当に？」

名倉^{ナクラ}が目を見開いて聞いてくる。

ちよつと待て、俺も聞いてないぞ。

「ちよつと待て……」

そう言おうとすると、早希^{サキ}に抱きつかれ、制止させる。

それに、小言で、

「今は話を合わせなさい。じゃないと……」

邪悪な言葉を言っていた。

「本当に？」

名倉^{ナクラ}がもう一度聞いてくる。

「うん。ホントだよー」

「マリアじゃ無くて、あなたに聞いているの」

と、俺を睨んでくる。

「あ……そうだな。別に悪い事じゃないし」

あれ、なんか自分で自分の言ってる事が解らない。

「…それは、邪^{よこしま}な考えてすか」

「いやいやっ！ こいつにそんな事したら殺されるから！」

「は？ マリアに、あなたが？」

そうか、こいつは早希^{サキ}の裏の顔を知らないのか。

「何でもない。じゃあ、そう言うことだから」

「そうそう。瑠璃^{ルリ}は気にしなくていいよ」

「そう……ですか。もういいです」

口元に手を当て、考え始める。何を考えているんだ。

「じゃあ、名倉^{ナクラ}も一緒に帰るか？」

俺は鞆^{たもと}を手に提げながら聞いた。

……正直、早希^{サキ}と2人きりで帰りたくない。「まあ、いいでしょう」

名倉^{ナクラ}の了解が出た。

一安心だな。

「……それで鷹斗くんはどんな人なの？」

早希^{サキ}が名倉^{ナクラ}に俺の情報を聞き出している。

……本人の前で聞くなよ。

「…そうですね。あの人は基本馬鹿ですね」

……名倉^{ナクラ}、本人の前で言わないでくれ。

「——っと。じゃあ、俺らはこっちだから」

「では、また明日」

「じゃねー。瑠璃^{ルリ}」

大きく手を振る早希^{サキ}。

小学生？

名倉^{ナクラ}が道の角に曲がった瞬間。

「はあ〜。やっぱり」

早希^{サキ}が溜め息。何で！？

「溜め息は俺がするはず何だが」

「あんた、本当に瑠璃^{ルリ}を誑かしてるのね」

「今の会話のどこにそんな要素があった！？」

「いやね。瑠璃^{ルリ}が私達以外の人の事をあんな楽しそうに話すなんて。何したの？」

「いや、特に。……戦線布告されたくらいだぞ」

「何言ってるの？」

心底呆れたように言ってくる。その喋り方、止めてくれ。

「何かな。一回戦った後、あなたには負けません〜的な事を言われた。そんだけ」

笑い話の様に言うと、早希^{サキ}に怒鳴られた。

「あんだね！それは！瑠璃^{ルリ}にとって！告白と同レベルの事よ！」
息を荒げながら熱弁される。

「ああ……そうですか」

「そうですかじゃない!!」

いちいち突っかってくる。

「ってかさ、何でお前はそんな名倉^{ナクラ}の事が好きなの？女子なのに」

「それは……子供の頃から可愛かったからよ！」

……は？

こいつは、名倉^{ナクラ}が可愛いからこんなストーカー紛いの事をするのか？

「……それだけ？」

「それだけって……あんだね。あの子が外にいた頃、何人に結婚を申し込まれたと思う？ 3桁よ。そんな可愛い子を私がほっとける？ ほっとけないでしょ！ だから、私はあの子があんたみたいな奴にとられるのが嫌なの！」

「ごめん。俺はあいつが俺に好意を寄せてるなんて思えない。逆にそんな可愛い奴が俺を好きになるなんてありえない。それでいいだろ」

「良くないわ！ あんたはどれだけ瑠璃^{ルリ}が積極的なのか解ってないでしょ！」

「わからねえよ。知り合って間もないんだからさ」

「もういいわ。私は瑠璃^{ルリ}があなたを諦めるまで家に居るわ」

それは止めてくれ。

結局、家に着いたらあいつの荷物整理をさせられた。

ってか、あいつはいつの間生活用品を俺の家に届けていたんだ？

就寝時、俺はベッドを占領され、床で寝る事になった。

――深夜。

寝れない。ひたすらに寝れない。

腰やら背中がゴツゴツいつてる。

床で寝れるか！

俺は立ち上がり、散歩に出た。

ベッドの上であんな無防備に寝られて、一緒の部屋に居られるなんて。俺には耐えられない。

そこらを歩いて帰るつもりだったのだが、いつの間にか結構歩いていたらしい。名倉^{ナクラ}の家も通っていた。

あいつの部屋。まだ明かりが付いてるな。何してるんだ？
起きてるのなら、何でこうなったか理由だけ話すか。

そう思い、マンションに入る。自動ロックのマンションなので中に入るために呼び鈴を鳴らさなければならぬ。

どうしよう。

迷った挙げ句、ボタンを押そうとした瞬間。

ズツ――。

ズズツ――。

何かが開く音。

もしかして、また「侵略者」？

16 家に

この感覚は――。

あ、ドアが開いただけか。

中から私服の学生らしき男が出てきた。
今から外出するなんて、どんな奴だよ。
まあ、自分もそうなのだが。

つと、そいつのお陰で自動ドアが開いた。
見知らぬ男よ。感謝する。

名倉^{ナクラ}の部屋番号の階にたどり着いた。

なんかストーカーみたいだな。

そんな事を考えていると、名倉^{ナクラ}の名前が見えた。

……どうやって話を切り出そう。

こんな時間に来て、本気^{マジ}でストーカーに思われないか？
目の前に来れば来るほど考えが変になる。
まあ、いいか。どうなっても。

ピンポン。

……やばい。緊張する。

……この沈黙が逆に辛いよ！

「……はい？誰ですか？」

うわ！何か眠そうな声が逆に可愛い！？

「……えっと、カミノ神野です……」

「えっ！鷹……斗？」

名前を呼ばれるのがこんなに嬉しいなんて。初めてだ。

「ナクラ名倉……だよな？」

「名前で……。あと、今出るからちよっと待って」

「ああ」

パジャマのナクラ名倉、どんなだろう。
想像しただけで可愛いすぎる。

つと、ドアがちょっとだけ開いた。恥ずかしげに顔を覗かせている。

「何？」

「ああ、えっとだなー。ナクラ名倉に会いに来た」
「……。……。」

耳まで真っ赤にする。

何か変な事を言っただろうか。

「……入って」

ドアが大きく開けられる。

ナクラ
名倉の服装が露わになる。

白を基調としたレースが少し付いているパジャマ。似合っている。

「良いのか？」

「いいから!!」

部屋の中に入ると、女子だった。

ピンク一色で埋め尽くされている。

「これはまた……」

「は、話は何なの!？」

また顔を真っ赤にしている。

「いや特に話つて程でも無いのだけど、早希がさ、俺のベッドを占領して寝れないから散歩してたらここに着いた」

「…それだけ？」

「うん、で電気が着いてたから何してんのかなーって」

「それは、小説の続きを書いてました」

「そうか。じゃあ、特に用事もないし、帰るよ。邪魔だろうしな」

腰を上げ、帰ろうとした。

「待つ、待って!!」

袖を引っ張られた。

どこのラブコメ展開だよ。

「何？」

「この……この小説を読んでっ!!」

渡されたノートの束。もしかして、続き？

「分かったよ。帰ってから読むよ」

「ここで読んで!」

涙目、それは反則だと思う。

強引に帰ろうとしたら、涙目で袖を引っ張られる。

俺はそれを無視出来るほど冷酷ではない。

ひたすら読み続け、その間に名倉^{ナクラ}が書いた分も読んだ。

結論、朝になった。

「……どうしよう」

「……そうですね。休みましょう」

「何を？」

「学校を」

「いや駄目だから!」

「……じゃあ」

ズズ——。

ズズズ——。

……。……。

これって、「侵攻者」？

「今のつて……」

「「侵攻者」ですね。こんな時に」

「行くか？」

聞いてみると、名倉^{ナクラ}は少し考え込んでから言った。

「少し準備があるので先に行ってて下さい」

「そうか。じゃあ先行ってるぞ」

感覚を集中させ、「侵攻者」の位置を割だす。

登校する時間だし、何人かは戦っているだろう。

能力者^{アビリティ}は「侵攻者」を倒し報告書や残骸を提出すると、報酬^{アビリティ}を貰う事が出来る。

実際、鷹斗達は強制で戦闘しなくとも良いのだが

まあ、風紀委員だし、出来るだけ「侵攻者」を倒しておかないとな。

鷹斗が着いた頃には、粗方片づいていた。

——あと、10体程度か。

「……呪^{リリ}縛^{ース}二^{フォー}陥^ル者」

鎖を数十本召還し、「侵攻者」を鎮めていく。

「おつ、鷹斗^{タカト}！」

後ろから声がかかる。

狩野先輩カリノか。

「あ、先輩。どうしたんですか？」

「ここが通学路だからな。お前はどした？その格好」
「はい？」

先輩に突っ込まれて変な声を出してしまった。

自分の服を確認。

今は登校時間。

自分は私服。

……。

うん。完全に遅刻だな。

頭を抱えて1人で悶絶。

そこに、制服を着た名倉ナクラが手を振りながら来た。

「鷹斗タカト……！って、何してるの？」

お前は着替えたのかよ！！

17 デートに

「はぁ……」

放課後、溜め息をついている俺に名倉^{ナクラ}が声を掛けてきた。

「良かったじゃないですか」

「ああ、うん。そだな……」

結局、あの後遅刻したのだが、「侵攻者」との戦闘の為に遅刻をしたことになり、免除してもらった。

と、そういう訳で遅刻にはならなかったのだが。1つ問題がある。クラスの奴らは何故か俺が名倉^{ナクラ}の家に居た事を知っていた。

何故だ!?

「今日は……周りの目が酷かった……」

「それはそうですね」

名倉^{ナクラ}もそれは感じてたらしい。今日は特に、男子からの視線があつたな。うん。

「一緒に帰ります?」

「ああ。また変な噂にならなければいいけど……」

「ではそうしましょうか」

「人の話を聞けよ……」

下駄箱で靴を履き替え、外に出る。

「そう言えば、マリアはどうしたんですか？」

門を越えた所で聞かれる。こいつもやっぱり気になるのか。

「早希^{サキ}か？ あの人は2年だからまだ授業だろ」

「そう言えばそうだね。今日は、ちょっと行きたいところがあるんだけどいいかな？」

「良いけど。どこ？」

「えっと、こつち曲がつて」

歩きながら言う。何かデートみたいでドキドキするな。まあ、名倉^{ナクラ}にそんな気はないと思うが。

学校から15分程歩いただろうか。着いた所は、ゲームセンターだった。

「一度来てみたかったんですよ」

目を輝かせながら入っていく。
可愛いな。

「何がしたいんだ？」

「あれ……かな」

恥ずかしそうに指差したのは、UFOキャッチャーのぬいぐるみだった。

名倉^{ナクラ}もそんなのに興味あるんだな。まあ、女の子だし当たり前か。

「どうやってするの？」

「は？ 遊び方知らないの？」

「……うん」

とんだ箱入り娘だな。

これも早希が近づかせないようにしたのだろうか？

「なあ、この中の何が欲しいんだ？」

「……全部」

「……全部？」

「はい。全部欲しいです」

手を握り締めながら言いやがった。くそつ。可愛すぎる。しかし、それが無理なのは分かっている。

「全部欲しいかもしれないが、金銭的に無理だ」

「そう……無理、なんだ……」

哀しげに名倉が呟いた。

……そして、数時間後に自己嫌悪している俺と、両手一杯にぬいぐるみを抱えている名倉がゲームセンターから出てきた。

ゲームセンターの外は真っ暗だった。いつの間にこんな時間が過ぎたのだろう

「今日は有難う御座います」

ぺこりと頭を下げる名倉。

この姿が見れただけでも良しとしよう。

「それと、今日はこの後予定は無いですか？」

「ん？無いけど？」

「そうですか。なら、このぬいぐるみを運ぶのを手伝ってくれませんか？」

「……別にいいけど」

「有難う御座います。家に着いたらお茶でもしましょう」

「おう、了解つと」

名倉^{ナクラ}からぬいぐるみを殆ど受け取り、家に向かう。

「けどさ、何でお前^{こいつ}「学園都市」に来たんだ？」

帰り道、そんな会話をしていた。

「何故って聞かれたら、親に抵抗したかったから……かな」

「へー。親は反対したんだ」

「うん。私を家から出したく無かったみたい」

「マジで箱入り娘かよ」

「？ どうしたの？」

「……いや、何でも無い。それより、お前って今までかなりの奴に求婚されてたんだな」

「え？！ 誰に聞いたの？！」

「早希^{サキ}から」

「け、けど！ 全部断ったんだよ！」

「それも聞いたよ」

必死の抗議を軽く聞き流す。

冷静になり、抵抗するのを諦めたようで。

「……ん、そう」

「まあ、お前は可愛いからそうもなるよな」

顔をボツと紅くさせ、視線を下に落とす。

……と、そこに、数人の男達が集まって来た。

「君、可愛いね。今から遊ばない？」

中心にいた男が名倉ナクラに話しかける。

「誰ですかあなた達？」

不機嫌そうな目を向ける名倉ナクラに、男達が腕を引っ張ろうとする。

「お前らっ……」

俺が男達に声を掛けようとする。

……と。

「おいおい。こんないたいけなお嬢さんに何してんだあ？」

赤髪の男が男達の中に入っていく。

「なんだてめえ？」

男1人が赤髪の胸倉とつかみかかり、殴ろうとする。

が、それよりも早く赤髪が男の顔面を殴りかかる。

「……っつ！！ 何しやがんだコイツ！！」
「おいテメエ！！ ふざけんなよ！！！」

男達が殴りかかるうとするが、返り討ちにされる。

「ちょ、逃げんぞ！！！」

リーダー格の男が叫び、残っていた男達が逃げていく。

なんだったんだ？ あいつら。

「大丈夫ですか？ お嬢さん？」

にこやかな笑顔で尋ねる。見た目不良なのに中身は好青年だ。

「えと……。あの……」

名倉^{ナクラ}の頬が紅潮している。

「ああ、彼氏がいるのかあ。じゃ、いいや」

赤髪が俺を見ながら言うてくる。

「これは彼氏じゃー！……」

名倉^{ナクラ}が訂正をしようとする。

「じゃな」

その頃にはもう赤髪はどこかに行っていた。

何だったんだろうか……。

18 ゲーセンに

何だったんだろう。あの人は。

「嵐みたいだったな……」

「……そうでしたね」

その後、帰り道にそんな話を話していた。

話をまとめると、名倉^{ナクラ}が絡まれる。俺が止めに行こうとする。が、赤髪^{ナクラ}の男が乱入する。男が名倉^{ナクラ}を助ける。

……そんな感じかな。

「けどさ、何でお前^{こい}「学園都市」に来たんだ？」

1通り話を整理したし、話を振ってみるか。

「何故って聞かれたら、親に抵抗したかったから……かな」

「へー。親は反対したんだ」

俺は、親居なかったからな。誰も反対しなかったな。……ってか反対する奴すら居なかったし。

「うん。私を家から出したく無かったみたい」

「マジで箱入りかよ」

「?どうしたの？」

ぬいぐるみで口元を隠しながら言われた。もふもふいってる。

「……いや、何でもない。それより、お前って今までかなりの奴に求婚されてたんだな」

「え！？誰に聞いたの！？」

かなり狼狽^{たふし}えてる。面白いな。

「早希^{サキ}から」

「け、けど！全部断^{ことわ}ったんだよ！」

「それも聞いたよ」

必死の抗議を軽く聞き流す。

冷静になり、抵抗するのを諦めたように。

「……ん、そう」

「まあ、お前は可愛いからそうもなるよな」

顔をボツと紅くさせ、視線を下に落とす。

それから数分歩いた頃、名倉^{ナクラ}のマンションに着く。

名倉^{ナクラ}がマンションの鍵を取り出し、マンションのドアを開ける。

「階数は覚えてるよね？昨日は1人で私の家に押し掛けてきたんだから」

嫌味っぽく言われた。

彼女なりの反撃なのだろうか。

「うつ……。そ、それは……。すみません」

「別に良いですよ。……うつ……。嬉しかった……。ですし」

「ん、そうか。なら良かったよ」

名倉^{ナクラ}に嬉しいと言われるとちょっと照れるな。

「何を飲みますか？」

名倉^{ナクラ}の部屋に着いてから言われた。

「じゃあ、お前と同じので」

「……うん。分かった」

良い匂いがしてきた。名倉^{ナクラ}って料理出来るのか？ 聞いてみよ。

「名倉^{ナクラ}！。お前って料理出来るの？」

「ん？……何？」

紅茶を持ってきたと言ってきた。

……めっちゃ高級感のあるティーセットだった。

「なあ、これって値段幾ら？」

ティーセットを指差しながら言ってみた。

「どれ？ ああ、これはね……幾らだろ？」

首を傾げられた。

可愛いから許す！

「そつか。さっきの話だけど、お前料理出来るの？」

「まあ……そこそこには出来る……かな？」

^{ナクラ}名倉の料理。食べてみたい！

「お前の料理……食いたいんだけど……」
言うのは何か恥ずかしいな。顔赤くなってるかも。

「へ！？ そんな……料理なんて……」

^{ナクラ}名倉も何故か顔を赤らめた。何を想像したんだろ。

「……良い……よ」

上目遣いに言ってきた。嬉しいな。

「何が食べたいですか？」

「え！？ 今から作んの？」

「……あなたが食べたいなら。私は良いですよ」

「……じゃあ、頼むわ」

「では、少し待ってて下さい」

パタパタと去っていく^{ナクラ}名倉を見送った。

……実際に食べれるとなると緊張するな。

ヴウウンヴウウン。

何か鳴ってる。

^{ナクラ}あ、名倉の携帯に電話が来てる。

「名倉^{ナクラ}！。電話来てるけど？」
台所に向かつて声を掛ける。

「あ、ちょっと代わりに出てくれますか？」

台所から声が返ってくる。

「りょーかい」

携帯を取る。狩野先輩^{カリノ}からだ。

『あ、瑠璃^{ルリ}か？』

「えと……神野^{カミノ}です」

『は？何で？』珍しく狩野先輩^{カリノ}が焦っている。

「あのですね。話が長くなるので端折^{はしよ}ります。
いので俺が出ているだけです」

『ああ、そうか。お前にも必要な事なんだが』

「はい。何……「ひゃあ！」」

名倉^{ナクラ}の悲鳴が聞こえてくる。

『……お前ら、何してるんだ？』

狩野先輩^{カリノ}に疑り深く聞かれた。

「いえ！邪な事はしてないです！！」

「俺は別に良いんだが。眞理^{マリン}にはバレるなよ」

何かアドバイスされたよ。

「それで、話って何ですか？」

今名倉^{ナクラ}は手が離せない

『急な事なんだが、明日の学内戦に参加するから』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721k/>

アビリティ・リリース

2010年10月11日14時45分発行